

ファラデーやワットに続け



工学院大学 理事長

大橋 秀雄

本学園のルーツは、120年前の明治20年、東京築地に開学した工手学校に遡ります。開学の目的は、開校式で中村貞吉校長が新生に与えた訓辞の中ではっきり語られています。現代風の表現に要約すると、次のようになります。

「本校の教育目的は、英語でいえばフォールメン(foremen)、すなわち工場などで現場の長となる工手を育てることです。工科大学教授が中心となって諸君の教育に当たりますが、本校を大学と誤解してはいけません。一年半の短年月で学士を育てることは不可能で、むしろ現場の技術に明るく、実践力の高い工手をみっちり育てようとしています。・・・しかし諸君、私は一生涯工手で終われといっているわけではありません。卒業後も勉強を続けて努力すれば、やがては学士をしのぐ大技師になったり、ファラデーやワットのような大学者にもなれるのです。・・・」

教育の目的をはっきり示したうえで、製本工場の見習いをしながら夜学に通って勉強したファラデー(Michael Faraday、電磁誘導を発見し、誘導法則を導く)、工手からたたき上げたワット(James Watt、蒸気機関を改良し、産業革命への道を開く)の例を引いて、努力次第で未来はいくらでも広がってゆくと勇気づけました。まさに名演説といえます。

工手学校から始まった教育の伝統は、昭和3年に工学院と名を変えてからも連続として引き継がれてきました。工学院は、昭和24年に工学院大学が設置されたのを機に、専門学校と大学の二本立てで実践的技術者の育成を担ってきました。

学士を目的としない専門学校は、工手学校の伝統をストレートに引き継いで来たといえます。しかし、工手学校設立当時には年間数十人に過ぎなかった工学士が、今や年間10万人以上社会に出るようになりました。また技術が、かつての技能依存から科学依存へ大きく変質しました。このような時代の変化を受けて、工手学校の伝統を、これからは大学と大学院、さらには将来付設される社会人教育部門が一丸となって継承することになりました。専門学校の輝かしい伝統に幕を引くことになったのは無念の思いで一杯ですが、これも進化 evolution の過程として厳粛に受け止めたいと思っております。

技術には、対象とする実体(モノやシステム)があります。それを理解する方法として、実体から入って理屈に至る道と、理屈から入って実体に至る道があります。私が学生の頃は、自家用車などは希少で、大学で内燃機関の講義を受けてから初めてエンジンの実物に接しました。吸気管も排気管も区別ができずに、苦勞したものです。最近では、子供の頃から自動車エンジンを見慣れているでしょうから、内燃機関の講義を受けても、構造は当たり前でむしろ燃焼やバランスに興味に向くでしょう。私は、実物から理屈に入る教育の方が、実践的技術者を育成するために適しており、また未来への可能性を孕んでいるように思えてなりません。工手学校、専門学校を通じて引き継がれてきた教育の伝統を確実に引き継いで、第二、第三のファラデーやワットが巣立って行くように、学園が一丸となって取り組んで行きましょう。